

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300153		
法人名	社会福祉法人エルム福祉会		
事業所名	グループホーム たじまの杜		
所在地	栃木県那須塩原市二区町500番5		
自己評価作成日	評価結果市町村受理日	平成26年3月31日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.t-kicenter.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社団法人 栃木県社会福祉士会		
所在地	宇都宮市若草1-10-6 とちぎ福祉プラザ3階 (とちぎソーシャルケアサービス共同事務所内)		
訪問調査日	平成26年2月6日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・ソフト面として・・・家庭的な雰囲気や重要視し、寄り添った支援・介護を行っている。月曜日の朝や職員会議時に法人理念とスローガンを唱和し、言葉だけで終わらないよう職員一人ひとりの心にとどまり支援・介護する力になるよう職員教育に特に力を入れている。開所2年目なので、職員の成長が事業所の成長・利用者様へのより良い支援・介護に繋がると考えている。また、ボランティアや現場実習などを積極的に受け入れ、オープンな事業所を目指している。
 ・ハード面として・・・恵まれた自然を生かし、建物の設計(暖炉や有線放送、家事動線や介護動線等)やインテリアデザインにもこだわりを持った。利用される方も職員も居心地の良い場所となるよう工夫している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

キリスト教の精神を理念に、5つのスローガンを掲げ、家庭的な雰囲気を大切に、利用者にとって居心地の良い場所は何かを常に考えながら支援に当たっている。また、「地域に生きる」をモットーに地域の人たちに溶け込んだ事業所を目指している。①自然豊かな森の中に、木をふんだんに使ったコテージ風の建物があり、居間や居室からは素晴らしい日本庭園が眺められる。照明やインテリアにもこだわり、暖炉からは暖かいぬくもりが感じられ、常に静かな音楽が流れている。癒やされる落ち着ける生活空間を作り出している。②職員と利用者さんの会話を大切に、常に利用者さんが穏やかな表情であることに心掛け、否定や押しつけはしないように寄り添う支援を行っている。③運営推進会議は、様々な課題設定をして、前向きな活発な議論が行われている。④管理者は地域での生活が長いという利点を活かし、地域のネットワークを活用した近隣との関係作りを実践している。⑤資格奨励制度があり資格取得者には奨励金が支給される。上質な生活環境の中で、利用者は、ゆったりと自分のペースで生活を楽しんでいることが感じられる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	5つのスローガンを職員全員が暗唱しており、毎週月曜日の朝と全体職員会議にて必ずスローガンを声に出している。全員で大きな声で暗唱することにより、その意味を再確認している。	「キリスト教精神にのっとり、隣人愛を持って社会に参加する」を法人理念に5つのスローガンを掲げている。職員は常にスローガンを心に置き介護に当たっている。管理者と職員は、実践のなかで理念を検証し、理念の再確認を行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	施設長は、地区の福祉協議会のボランティアに加入し、地域の一人暮らしの方への「友愛訪問」に参加したり、地区の方が「そば打ち」をしに来て下さる。利用者と共に地区の盆踊りやコミュニティー祭りに参加した。事業所で開催したクリスマスコンサートの時には地域の方に声をかけ、20名以上のご参加をいただいた。	地元の地主さんより土地の寄贈を受けて開設した事業所である。施設長自身も地元出身で、地域との関係は深い。また、自らも地元社会福祉協議会のボランティアとして活動しており、事業所に近隣の人が気軽に立ち寄れる関係も少しずつ作り出されている。利用者や家族も地域との結びつきが強い。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	利用者が外出する場所(教会・公民館や行事)において、私共の支援の仕方などを通して、認知症の方への対応を説明する機会がある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催しており、利用者の状況・行事などを説明した上で、委員の方からの助言や協力を得ている。より具体的な課題を取り上げ話し合っている。最近のご家族様・ご本人様が複数名ご参加いただけるようになった。	自治会長、地元社会福祉協議会長、民生委員、包括支援センター、市職員のほか、利用者や家族の希望者が参加している。利用者にとっては、家族とともに過ごせる良い機会になっている。介護保険や感染症対策などの議題を取り入れながら、家族の疑問にも答える活発な意見交流が行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは連絡を取り合っており、対応の仕方・書類に関する質問などに答えて頂いている。又、月に1回利用状況を市へ報告している。運営推進会議にも市の職員に毎回参加していただき、支援計画の実施状況をお伝えしている。	新しい事業所であり市とは密に連絡を取り合っている。疑問点に対しても迅速に回答してもらっている。問題ケースなどは包括とも連携している。施設長自らも友愛訪問のボランティアをしており地元社会福祉協議会や市との関係は深い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	利用者の尊厳に配慮し身体的拘束をしないケアに努めている。事業所内部研修で、身体拘束とリスクマネジメントについて学び、現在の事業所の状況として起こりうる事柄を検証した。	内部研修を行い、車いすでの移乗や転倒防止など具体的な事例の検討を積み重ね、拘束をしないケアについて実践の中から学ぶ努力をしている。人権委員会を設置し、リスクマネジメントやヒヤリハットについて、少しでも不安に思ったことは報告するよう職員とも話し合い実行している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内に人権委員会を設置している。高齢者虐待防止に関する書類を職員間で回覧し、注意喚起をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者と職員は成年後見制度活用講座を受講し、その内容を全職員に内部研修として全職員に周知・学習する機会を持った。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	1時間程度の時間をかけて説明し、又、質問等がある場合にはその事に対して答える時間も取っているため、理解、納得は得られていると考えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	「御意見箱」を設置し、利用者・家族・外部の方、職員などさまざまな方からの意見が反映出来るようにしている。現在意見箱から得られる意見は少ないが、ご家族が来所時にコミュニケーションを取り、様々な意見や思いを聞くことを徹底している。また、面会簿に意見を記入して下さるご家族の方もおられる。	家族の面会が多く、その都度家族からの意見要望を聞いている。面会簿に意見を書いてくれる家族もいる。今まで家族との窓口は、施設長とケアマネであったが、今年度から担当職員が面会時の窓口となり、より多くの職員が家族の意見要望を聞く機会を得ている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎週金曜日に職員会議を開いており、職員からの意見を聞く機会を設けている。	毎日2回ミーティングがあり、月1回全職員による職員会議、内部研修会がある。週1回リーダー会議を行いリーダーを通じて職員の意見を反映している。人事考課があり、自己評価の中で職員意見も反映される。施設長は開設2年目を迎え職員との距離感を取るよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度や資格取得に対する補助制度の導入により職員の質の向上も含めた就業環境の整備に取り組んでいる。職員の希望休日については出来るだけ配慮した上でシフト表を作成している。		
13		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修は毎月の職員会議時に実施している。外部研修として実践者研修・計画作成担当者研修を受けている。自己啓発として、資格取得補助制度を利用して社会福祉主事に1名、介護支援専門員に4名取得を目指している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	那須塩原市の地域密着型事業所連絡協議会及び介護支援専門員協議会に参加し、情報交換等を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人からの話を十分に聞き取り、やりがいなどを計画にもり込み、本人の思いを出来るだけ実現出来るよう工夫している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族からの話にじっくり時間をかけて聞くことにより、家族の困っている事、要望を把握するよう努め、又、事業所としてどれだけお手伝い出来るかを検討し、伝える。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者様の生育、これまでの生き方、現在の状況、御家族様の要望など、よく情報を把握しスムーズに支援に入れるよう工夫し、その後については本人の様子を見ながら支援の方向性を検討できるよう配慮している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	御本人様の気持ちを重要視し、尊重しながら家庭的な関係が出来るよう、日々取り組み、反省を生かしている。職員間での話し合いは密に行われている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族が来所された際は、事業所での様子を出来るだけ説明し、意思の疎通を大切にしながら会話を多く持つようにしている。又、電話連絡も密にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	教会に通っている方が、そこでの交流を通して本人様の生き生きとした姿が見られる。	教会やお花の教室の通いを支援したり、俳句の投稿を支援したりしている。定期的な外泊、外出をしている利用者もいる。開設当初は、お友達が遊びに来てくれたりしていたが、最近は少なくなってきている。施設長としては、グループホームの生活の中で馴染みの関係が作れるように支援していきたいと考えている。	馴染みの場所への個別的な支援は現在も行われているが、グループホーム内だけの関係ではなく、元気だった時になじんでいた場所、若い時に行っていた場所などへの外出支援にも期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性は良いが、なかなか中に入っていけない利用者様に対しては職員が間に入って会話を成り立たせたり、レクリエーションの場で関わるタイミングを見ながら支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在そのような事例は見られない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いやりや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人から話を聞いて、実現できるよう支援している。盆踊りをしたい→9月末に実施。書道がしたい→書き初め実施。しもつかれを作りたい→実施予定。	利用者の話を聞き、書き初めをしたり、料理を作ったりして、色々な希望や要望を実現させている。認知度の進んだ方に対しては、職員はその人が穏やかかどうかを見極めながら、日常の実践の中で思いや意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりよく話をし、その会話の中から本人の生活歴、暮らし方を探り、職員間での気づきを実施している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	レクリエーションなどを行う際は全員に声かけするが、その時々利用者様の気持ちを大切に、促しはするものの参加は自由に行っている。計算ドリルを個別に購入し取り組んでいたり、洗濯物たたみやモップかけ、外の掃き掃除などを手伝っていただき、やりがいを見出してもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎週水曜日にカンファレンスを開きチームケアを確認している。また、毎月介護サービス計画書を見直しケアのあり方についてきめ細やかな対応をしている。	毎週利用者全員のケースカンファレンスを定期的に行い、モニタリングの結果などを検討している。計画作成担当者と施設長が協議して介護計画を作成して、必要に応じて短期3ヶ月の見直しが行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活記録と健康管理表及び業務日誌にてを詳細を記入し、出勤時に目を通し、捺印をすることを徹底している。また、個別支援記録にて一人ひとりの現在の体調・状態を確認し、支援や介護計画の見直しをしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の状況・要望などに合わせて、通院支援・買い物支援・帰省支援など柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	教会への送迎・引率散歩への同行など、本人様の意にそえるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医はそのまま継続とし、付添や通院支援、往診時は看護師や職員が対応し医師との連携を取っている。	利用者全員にかかりつけ医の受診が行われている。約半数の利用者は、往診をしてくれる近所のかかりつけ医を利用している。通院の場合も看護師が中心となり付き添い支援を行っている。受診結果については、面会時家族に報告して情報の共有を図っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	小さな変化の際や夜間であっても、看護師に連絡をとり、指示を仰ぐようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。また、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	特に協力医療機関である那須中央病院のMSWとは密接に連絡をとっている。利用者の入退院の際には、病院のMSW、NS、Drとの情報を共有して安心して入退院出来る様心がけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	運営推進会議にて議題として取り上げ、話し合った。一人ひとりの利用者様、ご家族様と密に話し合っ方向性を見出したいと考えている。今後職員間での勉強会を実施する予定である。	基本的には、グループホームは終の棲家であるという認識の基に看取りにとり組んでいる。家族の理解や職員の意識が重要であり時間をかけて職員とも話し合いながら力量にあった範囲で終末期に向けた支援を行っている。運営推進会議を通じて家族と話し合ったり、職員との勉強会を行っている。	終末期の支援を具現化していくためにも、早い内から家族と話し合い。また、職員の不安や、何処までできるかという疑問に答えていくためにも、勉強会や研修を通して、文章化やプログラム化等組織だった取り組みに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	3月、9月に普通救命講習を実施している。9月には地域の方も参加されている。また、今年度中に緊急時の対応についてご家族へのアンケートを実施する予定である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回避難訓練を実施したり、非常用の食品などを備蓄している。地域との協力体制を取ることができるように3月に地区で行われる災害訓練に参加予定である。	年に2回避難訓練を実施しており、職員の緊急時連絡網を使った夜間想定避難訓練を実施している。スプリンクラーを設置してある。今年度は地域の防災訓練に職員が参加して、その中で地域の協力も呼びかけていきたいと考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	支援におけるNot to do リスト「1. 無視しない。否定しない。からかわない。」「2. おこらない。しからない。大きな声を出さない。」「3. 子供扱いしない。ため口をきかない。」を徹底している。	Not to do リストを利用して、「否定しない、プライドを傷つけない、言葉遣いに注意すること等に配慮されている。利用者とのちょうど良い距離感を保ち、職員も気持ちに余裕を持ちながら、一人ひとりの尊厳を尊重した支援が行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	選択肢が多すぎて自己決定は難しい場合は、本人が望むであろう事を2・3の中から選んで頂き、自分で決定する喜びを生活の中で多く持つてもらっている。(ピンゴゲームで景品を選ぶ・カラオケで何を歌うかなど)		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴などは予定通りに入浴出来なくても、それに対応する。時間通りに出来なくても時間に追われるような対応はしないなど、職員が気持ちに余裕をもち、「～しなければならぬ」と思いすぎないようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	原則的に本人の意向に沿うように支援しているが、状況に応じて常識的な身だしなみや化粧を促すこともある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	家庭的なキッチンで調理しており、音や香りを楽しんでもらえるよう配慮している。また車椅子の方でも参加できるように高さを調整した流しを整備している。最近では皆でべったんぎょうざ、炭酸まんじゅう、パウンドケーキと一緒に作った。	食材は宅配業者に委託しているが、オープンキッチンで手作りされており、音や香りを楽しむことができる。箸や茶碗は家庭で使っていたものを持ってきてもらっている。家庭菜園で作った食材を使ったり、「しもつかれ」などの郷土料理を利用者さんと一緒に作ったものが提供されている。職員も同じものを会話を楽しみながら食べている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	健康管理表をつけ、食べる量、水分量を記入し、排尿、排便との関係、体調との関係性を把握するよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声かけにより一人ひとりご自身で口腔ケアを行い、状況により職員が支援している。口腔ケア用スポンジ使用の方がいる。口腔ケアセミナーを事業所内で実施予定である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	利用者の尊厳に配慮した声かけを心がけ、見守りをするよう努めている。	トイレは全て車いす対応になっており、トイレが判るよう壁にトイレサインがつけられている。失禁の多い方を含めて、リハビリパンツやパットを利用し、定期的なトイレ誘導で、失敗する前の排泄支援を心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量を記入し排便確認をしながら、ヨーグルトやオリゴ糖を入れた飲み物を提供したり、病院から処方されている薬を服薬している。毎朝9:30～ラジオ体操第1、2を個人のペースに合わせて全員で行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	出来るだけ1日おきには入浴して頂けるよう声かけ促しをしているが、本人が希望しない時は、次の日に再び声かけし、無理強いほしないように努めている。	入浴は、午前午後に係わらず、その人の入りたい時間に合わせ、無理強いすることなく入浴してもらっている。基本1日おきには入浴してもらうようにしている。個浴対応で、一人ひとりで浴槽のお湯も替えている。個浴や三方介助浴槽で対応しており、1対1または1対2の介助が行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の意に沿って支援し、又、促しによって就寝誘導を行っている。決して無理強いほせず、ホールで過ごされる場合もある。また職員と会話することで、心が満たされ、安心して就寝される方が多い。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診時の付き添いや、家族からの報告により、服薬ファイルを作成し、変更があった時はその都度職員に周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人の趣味で終わるのではなく、その趣味を皆で挑戦したりしている。絵手紙、貼り絵、カラオケ、ラジオ体操、映画鑑賞会、外出、寺子屋(ドリル)などを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの希望を聞いて外出はなかなか難しいが、可能な状態の時は出来るだけ支援できるよう工夫している。 例：紅葉狩り、ホテルの里へ見学 ※外出した際は写真を撮影し、利用者ご本人・ご家族へ提供している。	教会や華道教室の送迎、買い物など可能な範囲での個別の外出支援に対応している。また、紅葉狩りや花見など季節に合わせた外出を楽しんでいる。また、外食なども定期的実施されている。日常的な外出としては、敷地周りを散歩したり、家庭菜園を楽しんだりしている。冬場の時期は、100メートル有る廊下が散歩コースになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居時、自宅から持参されたお金に関しては、ご自身で管理できる方については御本人様管理にしている。その方以外は事業所預りとしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	可能な利用者には、本人自ら電話をしたり手紙のやり取り等の支援をしている。また新聞社に投句をしている利用者もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	インテリアデザインを工夫している。暖炉のある共同の空間では利用者様にとって居心地がいいものと思われる。有線放送を流すことでリラックス出来たり、配慮された庭の景色で季節感を味わってもらっている。	木をふんだんに使ったコテージ風の建物は、とても明るく落ち着きを感じる。暖炉やオブジェなどが置かれ、常に音楽が流れ癒やされる心地よい空間を作り出している。キッチンや浴槽はじめ建物は家事動線や介護導線にも配慮された機能的なものになっている。トイレサインや部屋の表示なども利用者本位に考えられている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	暖炉には自然に人が集まってくる。あたたかい火を見ながらうたたねをする方もいらっしゃる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたタンスなどの家具を持ち込んで使われている。	居室には、電動ベットと洗面台が備え付けられており、テレビやタンスなど馴染みのものや趣味を楽しむものが持ち込まれている。各室には空気清浄機も設置されており、健康面への配慮も行われている。部屋の識別がしやすいよう入り口に番地表示がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの位置が把握しやすいようにトイレサインを表示したり、各居室を「番地」表示することにより認知症の方への空間認識の支援をしている。		